

4054 地球のかおり：「乙女色の夜明け」(産経新聞) 心模様

南半球、ニュージーランド北島の最北端、レインガ岬の
少し東橋に、ノース岬がある。

季節は、南半球の夏。夜明けに遭遇した光景。

赤色というよりは、紅色。天空の微妙な色彩が、刻々と変わる。

眼前に展開される朝焼けの向こうには、南極がある。

辺境を訪ねる。地の果てを目指す。男の夢とロマン。

この先に何があるのだろう。

自分自身が、その地に立ち、実感を味わう醍醐味と臨場感。

学問や本やスポーツから得られるものとは、全く違う。

この日、まず、ニュージーランド最北端のレインガ岬を探訪。

北島のオークランドから、約 350 キロ。

高速道路があるわけではない。7 時間はかかる。

ここまで訪ねる人は少ない。

2 度目の探訪である。2 度訪ねるだけの価値がある。

西側は、タスマン湾が広がり、海岸線が、延々とつづく、90 マイルビーチ。

アクセスも容易、前回は、広大な海を楽しみ、

海岸線を車で走行することができる。

タスマン湾のサンセットを楽しんだ。勿論、取材も大成功。

サンセットがあれば、サンライズがある。日はまた昇るは、大好き。

好奇心が耳に囁いた。最北端で見る夜明け。

是非、見てみたい。前回は、東方向の道が見つからず、断念した経緯がある。

ブッシュに囲まれている。

東の海岸線までは、道なき道で、かなりの距離があると判断した。

この数日、好天気がつづいている。

今回は、簡単に引き返す選択でなく、行くための方策を練った。

地元の人だけが行く、旅人が知らない道があるのかもしれない。
立入禁止の看板があるわけでもない。
私有地でもなさそう。アラスカやカナダのように、
熊がいる様子もなさそう。多方面からの情報収集につとめた。
しかし、動物だけでなく、植物も恐ろしい。

カナダの山奥の湖水で一度、毒があったのか、植物にかぶれて、
治療するのに、1ヶ月余、かかったことがある。
ともかく、油断大敵である。慎重の上にも、慎重に越したことはない。
何しろ、ひとり行脚の自業自得、自己責任の旅。

そんなこんなを、考えていると、見てみたい気持ちが強くなってきた。
見られないと思うと、よけいに見たくなる、あまのじゃく。
何事も、まず実践。行けるところまで、行けばいい。
結果より、チャレンジの楽しみを優先。
結果が、ともなえば、なお嬉しい。

今日はこれで退散。好天気が続きそう。明日、再挑戦してみよう。
いけなかったら、その時のこと。
その日、少しだけ、下調べ。地形を体感。道はあるのかいなか。
岩場なのか、柔らかい土なのか。
何しろ、暗い夜明け前からのチャレンジになる。

ともかく、今のところ、道らしい道が、ないことだけは、確認できた。
全く、人が通った痕跡がないわけではなさそうな気配。
多分、海岸線には到達するだろうが、
念のため、一脚で、穴やクレパスがないか、慎重に。土質は、堅牢な様子。
帰り道の道標しるべも、置いておかねばならない。
しっかりした作戦があるわけではない。大雑把に把握。
そうしないと、冒険が面白くない。

翌日、夜があけない前に、道なき道に分け入った。
道への挑戦、これが、なんとも面白い。

このノース岬、大きくは、ノースランド。
南太平洋のタヒチ方面から、大型のカヌーでやって来た
マオリ族が、住みつき、独特の文化をつくった地。
未開発ということはない。おそらく、隅々まで探訪しているだろう。
しかし、現代人のように、無作為に、自然を破壊しない。
それは、自然の偉大さと恵みを知っているからと推理する。

ブッシュの高さも、背丈くらい。
その間を縫って行けば、なんとかなりそう。
天候はどうかのだろう。快晴とベストポジションが得られるか。
女神が、微笑んでくれるだろうか。
幸い、お天気は悪くなさそう。昨夜の満天下の星空が語っていた。
日中は暑い、朝晩は冷え込む。寒暖の差が激しい。
ワクワクしながら、待つ時間の面白さも、また醍醐味。

そして、想定したポジションを定めた。
今朝は、暗い内からの出発を予定していたので、
飲み物や軽い朝食を準備。
寄せる波や、潮騒を耳にしながらの朝食。
これ久楽流の、旅の醍醐味。

どんなものであっても、不^ま味いはずがない。
心も解放されている。健康であることに感謝する瞬間。
ここに、音楽があれば、最高なのだが・・・
何よりも、安全そうなので、助かる。心の余裕があると、楽しみは、倍になる。
心の持ち方や、有り様が左右する。

深い闇から、徐々に明るくなってくる。その微妙な変化。
その場にはいないことには、わからない。
ともかく、色彩が素晴らしい。感動と感激。
そう表現するしかない。
目と耳で、肌で、空気を感じ、空気を味わう。

数多く、サンセットも、サンライズも、見てきている。
さすが、南半球。北半球の光とは違う。
最北端のこの地に来る道中で、真っ赤な夕陽を目撃している。
まさに、燃えるような光景の取材に成功している。

眼前の光景は、やわらかな乙女を感じさせる、^{あわ}淡いひかり。
この空気感、表現できたら、嬉しいのだが・・・
その後の時間の経過は、至福の時間。

太陽が頭を出すまでの、実に微妙な、なんと表現すればいいのか。
地球の色彩、夜明けの色彩は、何色あるのだろう。
半島の、うしろの色彩が次々と変わる。
浮かび上がる、半島のシルエットも、ビューティフル。
もう、言葉がない。ただ、凝視するだけ。

未開や未知の地には、心の風景に、出会う確率が高い。
まだ見ぬ心の風景。今回も、裏切らなかつた。
この日の地球の色彩は、真っ赤というより、見事な紅色。
訪ねて良かった。